
The Importance of Being Constance

井村 君江

「人生は素晴らしい瞬間からできている悪しき15分間に過ぎない」その素晴らしくそして短かかった Wilde の人生(1) Writer's life と(2) House life の(2)の生活を、Wilde と共に送った女性、Constance Mary Lloyd。親しかった友人Bremont 伯爵夫人は Constance を、「従順でいつも変らぬ (constant) womanly woman であり、intensely feminine, thoroughly womanly woman であった」と言っている。女らしい女であり、Victorian Ladyship の典型 Constance は、Mrs. Oscar Wilde であろうと努めて坐折したが、少なくとも Cyril と Vyvyan の二児にとってはあくまで賢母であった。しかし作家 Wilde にとって Constance の存在の意味は、その生涯の前半と後半では異っている。だが Wilde にとって、A Woman of Some Importance であったことは否定出来ない。

1883年11月22日、アメリカ婦りの唯美主義者 Wilde が、ダブリンのゲイティ座で、'The House Beautiful' と題する講演を行なったが、その会場に25才の Constance は熱心に耳を傾けていた。次の日の講演にも恐らく出席していたであろうが、3日後の26日に二人は電撃的に婚約を発表、翌年5月29日にバディントン教区の教会で、Constance を審美的花嫁衣装に飾って結婚式をあげ、話題となったのである。Wilde がアメリカでの審美的服装や室内装飾論の実現化をするのに、恰好の女性協力者を得た如き観がある。

結婚生活を始めた Chelsea の Tite Street 16の家は、また講演 'The House Beautiful' の考えを具体化する空間でもあった。Constance は良き協力者として、Whistler 風の壁絵、P. R. B. 風デザインの家具を置き、Morris の壁紙にジャポヌリー風に竹やガマの穂を花びんに生け、レースを編みクッションに刺繍をし、夫の意図に沿って室内の装飾に努めたのである。この趣味の上で、二人は一致を見ていた。1874年17才の Constance は、親戚の Lady Mount Temple の家に住んでいたが、その Torquay にあった Babbacombe Cliff の家は Ruskin のデザインに依るものであり、室内装飾は Burne-Jones と Morris で、P. R. B. 趣味、唯美的芸術の生活化という美的洗礼を、Constance は少女時代に既に受けていたのである。

美的感覚と共に文学的才能も Constance は備えており、可愛がってくれた祖母 Mary Hare Hemphill の死後、おばあさんの語った話として *There was Once—Grandmother's Story*

(1889) と *A Long Time Ago* (1892) という二冊の童話集を刊行している。子供たちが4、5才になって話が判かる年頃になったこともあるが、前年出た夫の *The Happy Prince and Other Stories* (1888) に刺激を受けたこともあろう。後者はまた *A House of Pomegranates* (1891) 刊行の翌年で夫の助言もあったとみられ、毎日夫婦唱導のように内面空間でも 'The House Beautiful' に努めていたとみられる。少なくとも1892年 Alfred Douglas が出現する迄の8年間は、Wilde は5時に起きて執筆し、子供に童話を聞かせたり、家の人々を招いて社交の時を持つという流行作家であってしかも *Ideal Husband* の時期であった。そしてこの8年間に主要な作品のほとんどが書かれてしまっている。少なくとも従順でひかえ目な良妻賢母 Constance は、作家 Wilde のために良き仕事の間を作っていた。

家庭にあって夫と子供に献身的な糟糠の妻は、もはや Sphinx without Secret であり、謎めいた魅力は消えている。詩人 Wilde の目は異次元の空間から出現したような冷い美少年を追いかけており、間もなく Wilde はこの女性協力者と築いた世界を棄ててしまう。1894年 Wilde は Douglas とエジプト旅行に出かけてしまい、Constance は幸福な妻の座から一変して、「孤独な忘れられた女」の位置に追いこまれてしまう。この頃 P. R. B の集りで知り合った Hatchards 出版社の Arthur Hamphreys に、Constance は悲劇的な境遇からの脱出を相談し、その信頼感がいつしか愛に変わり、Arthur の同情も愛情に移っていったことが、最近発見された往復書簡に覗くことが出来る。Rupert Hart-Davis は "She just needed someone to pay her some attention" と言っているが、急にふりかかった災害に遭って一人「雨ざらしになった極楽鳥」のような彼女は、二児をかえ途方に暮れ、誰れか相手を探めなくなったのは当然であろう。

1895年夫は投獄、財産は競売で、せっかく美しく飾装した家も家具もすべて水の泡のように消えたとき、手に残った二人の子供を立派に育てるのが母の務めと決意した Constance は、まず罪人として穢れた名前 Wilde を Holland 姓に変え、子供らの教育のためにイタリアからドイツへ Blacker 氏をたよって母国を去り、スイス、モナコと放浪生活ともいえる日々を子供のために送ったのである。母として強かった Constance であった。1897年には獄中まで Wilde を訪ね、離婚署名をさせている。

「私はほんとうに妻が好きでしたし、彼女を気の毒に思っている。妻がもし結婚するなら幸福な結婚をして欲しいと思っている。彼女には私が理解出来なかった。そして私には結婚生活はじつに死ぬほど退屈だった。だが彼女とはとてもよい性格を持っていた。それはすばらしく私に忠実であったということだ」後年になって友人 More Adey 宛の手紙で Wilde はこう言っているが、見方によってこの言葉は Constance の妻としての資格を認め、夫としての失格を自認しているものととれる。「男と女の間に友情はあり得ない」Wilde にとって自分を理解してくれる男の友人 Douglas や Ross は必要であった。女性にその両者を求め得なかった Wilde、妻としての女性と友人としての男性との生活を上手に操つ

て行けなかった Wilde は *Ideal Husband* としては失格であり、*Ideal Wife* たらんとした Constance と始めからベクトルの方向が違っていただけで、結婚したのは二人の悲劇というよりは Constance にとって、より悲劇的な出来事であったといえよう。しかし Constance という名が、著名な作家 Oscar Wilde の妻だった女性としてだけ知られているのは、まことに皮肉である。

